

『光の子どもとして』 (要旨)  
聖書箇所：Iテサロニケ 5:1~11

使徒パウロは、テサロニケ教会のメンバーに、主イエスの「再臨」の様子を具体的に述べた上で、その日をいかに待つべきかを語りました。先週に引き続き「再臨」について御言葉に聴きます。

### 【1】「主の日」は盗人のようにやって来る

「ノストラダムスの大予言」;日本における「ノストラダムス現象」(1973年~1999年)

使徒パウロはイエス・キリストの再臨を「主の日」と表現しました(参照:ピロ 1:6, アエ 5:18)。彼は多くの人々が関心を抱く主の日の「時と時期」について言及せず、人には予想できない時に「主の日」が来ると述べました。

「主の日」は「盗人が夜やって来るよう」(2)だと言います。すなわち誰も言い当てることのできないタイミングに訪れるのです。何らかの予兆があれば備えることもできます。しかし一般の人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき(現在形)にやって来るのだと言います。しかも出産の日のように、突然やって来て、避けることのできない日だと言うのです。

▷「破滅」(3)と「滅び」(IIテサロニケ 1:9)は、同じ言葉が使われています。神様から完全に引き離されるという意味で使われています。

誰一人として「主の日」がいつ来るのかはわかりません。しかしキリスト者は、その日が必ず来ると知らされています。「主の日」に備える者は、再臨がやって来た時に、神の約束の成就を知ることとなります。

### 【2】目を覚まし、身を慎む

私たちの実生活において、眠ってよいタイミングとそうでない時があります。その最たる例が、車の運転です。運転中に眠ることで自分の命を危うくするのみならず、他者の命を奪いかねません。パウロはテサロニケ教会のメンバーに目を覚ましておられるようにと勧めました(6)。

目を覚ましている:緊張感を保った状態(参照:マタイ 24:42-43, 25:13, マルコ 13:34-47)

身を慎んでいる:心を引き締めた状態(参照:Iペテロ 1:13, 4:7, 5:8)

主の日を待つ者は「油断」してはならないのです(マタイ 25:1-13)。

### 【3】「光の子ども」として

「…人はそれぞれ『正義』があつて 争い合うのは仕方ないのかもしれない だけど僕の嫌いな『彼』も彼なりの理由があるとおもうんだ」

(Dragon Night, SEKAI NO OWARI)

今日、正義と悪を区別することに対して、抵抗感を覚える人が少なくないように思われます(「正義」の名のもとで行われた争いの傷跡が癒えていません)。とりわけ「多様性を認め合う社会」では、括弧書き付きの「正義」とした方が、抵抗なく受け入れてもらえるでしょう。

ところがパウロは「光」と「暗闇」を鮮明に区別した上で、キリスト者に対して、あなたはどちらに属しているのかと、自覚を促しているのです。

「あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあつて光となりました。光の子どもとして歩みなさい。」(エペソ 5:8)

「御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」(コリント 1:13)

聖書によれば「光」に属している場合、「闇」からの攻撃対象となります。だから防御用武器(胸当て・かぶと)を身につける必要があると言うのです。しかも、この戦いは、目に見える戦いのことではなく、「悪魔の策略に際して、対抗する」戦いのことです。「暗闇の支配者たち」による攻撃に対しては、「信仰」「愛」「望み」の武器が有効なのです(参照:エペソ 6:11-18)。

人は「主の日」を予測可能な範囲に矮小化することで、安心を得ようとすることがあります。しかしあくまでも「主の日」であり、その日の主権は神にあるのです。「あの日に再臨があるから、その時の準備しておこう」と考えるのではなく、いつ再臨が来ても良いように、日々の生活を主と共に歩むことができますように。

